図書館員の四季

い。誌名の基準はどのようになっているのか編集上の疑問点は多い。

今後は、編集業務のかなめとも言うべき第一段階が過ぎたので、登録誌名入力と書誌データ修正の業者委託、その後検閲と所蔵データ入力となる。所蔵入力の作業は、会員でまた分担して行う予定であるが、膨大な作業のため、多くの会員に参加していただければと思っている。助け船を求む。

雑　　感

松阪中央総合病院　森川　治美

『情報化時代の最先端行く図書館司書』この新聞記事（産経新聞平成6年6月7日）が目にとまった。アメリカでは、司書は図書館の域を脱し、マーケティング、企業の経営戦略にまでタッチした情報をサービス、提供する仕事についているというのである。すでに図書館は、利用者のニーズにあった情報を、いかにうまく提供するシステムをもっているかが問われる職場だといえよう。そして、その情報をもとに利用者の仕事がすすめられることも多いだろう。コンピューターを駆使した図書館情報システムの進歩が企業の情報センターに求められ、最新情報入手に予算を費やさせているのである。

医療の第一線である病院における図書室の仕事も、生命に関わる情報の収集場所として、医療の戦略をリードする場として認められるべきだと思う。「予算をもっと！」と言いたいところだが、その前に私自身にもっとパワーをつけたいと思っている。

昭和53年より当院図書室に勤務し、はや15年が経った。当時生まれた子は、もう高校生。その頃の図書室を思い起こすと、狭いながらも広々とした場所だった。それが今では、雑誌書架も増え、コンピューター4台が座り、人ひとりが通る幅だけを残して入り組んだ場所となった。これも情報化の表れだろうか。

今、当院は新築計画の真っ最中にある。図書室にどれだけの機能を持たせるのか、病院の方針も踏まえて検討中である。アメリカの情報学を修めた司書のようにはいかないが、情報化時代の中での図書室が果たすべき役割について、考え直す時期ではないだろうか。頼られる図書室になれるよう努力したいと思う今日この頃である。

思い出と現実

姫路赤十字病院　花北まゆみ

電話交換手、案内所、庶務課と異動があり図書室の担当者となって、早くも7年。幼かった長女も中学2年生。

当初、図書室に縁のなかった私が「何で、私が！」と……毎日、びくびくしながら図書室へ。大きな机の前に、大きな体を小さくしてコチコチになって座っていたあのころ。今では、大きな机の前に、大きな体をより大きくして“デン”と居座り無断持ち出しのチェックに。以前は、先生方の声だけを聞いての仕事だったが、今は顔を突き合わせての仕事。「何を聞かれるのだろう、私にわかるだろうか」と、大きな体を小さくしてオドオドしていたあのころ。初めての質問、今でも忘れられません。退職された外科の Dr でした。

「花北さん、ゴリガーの本はありますか。」

「えッ、ゴリラの本？？」（沈黙）外科の Dr は大笑い。あのときのこと、まるで昨日のことのようです。今なら一緒に大笑いでき